

と私の王女様

異世界で芽吹く
百合の花



挿絵
こごあ
上田ながの

試し読み版

序章	J K異世界へ行く	006
第一章	奴隸生活	037
第二章	重なる身体	068
第三章	なんだかドキドキ、ムカムカする	090
第四章	貴女の為に	125
第五章	好きだから	147
第六章	お姫様の気持ち	157
第七章	べたべた生活	174
第八章	愛しい人に殺される夜	206
終章	一緒にいたい	231

登場人物紹介

レイン=ファル=アスタローテ

異世界の女王様。常にクールで感情を表に出さないが、国を想う気持ちは人一倍。自分と違う世界からやって来たという愛に興味を持つ。



みずしろ あい

水城 愛

普通の子供校生。異世界に来てからすぐにレインの奴隷となってしまう。活発な性格だが家庭の事情で他者の気持ちには敏感な一面も。

序章 JK異世界へ行く

(今日も暑いなあ)

後頭部で結った明るい色の髪を揺らしながら、水城愛みずしろあいは一人、家路に就いていた。ギラギラと照りつける太陽にうんざりとした表情を浮かべながら……。

今日は土曜日で学校は半日。それは正直嬉しい。けれど、真夏の炎天下を歩く羽目になるといふのはちよつといただけでない。垂れ流れてくる汗を手で拭いつつ、どこかでアイスでも食べようかなあ？ などと考える。

「あれ、愛じゃん」

「ん？ ああ、蒼葉あおば……それに雪菜ゆきなじゃん。久しぶり」

振り返る。声をかけてきたのは中等部時代の友人である三日月蒼葉みかづきだった。いや、蒼葉だけじゃない。隣には彼女の幼馴染みでもある桃園雪菜ももぞのの姿もある。

「……久しぶり」

ポソツとした言葉、頭を下げるのも少しだけだ。中等部時代もそうだったが、雪菜は相変わらず無愛想らしい。なんとなく苦笑しつつ「二人は相変わらず一緒なんだ」と呟いた。蒼葉と雪菜、昔からいつも二人はセットだ。どこに行くにも、何をするにも二人一緒。幼馴染みというよりも姉妹といった方が正しいくらいに……。

(いや、この二人の場合それはちよつと違うか)

二人の関係はちよつと特殊だ。ただ友人として互いを求めているのではない。二人とも親友として以上に想い合っていた。女同士だが、両想いである。ただ、どちらも相手の想いには気付いていなかった上、その気持ちを隠していた。

気持ちは分かる。なにせ女同士だ。想いを伝えて拒絶されたら……。それが原因でこれまでの関係が崩れてしまったら……。そう考えれば告白に踏み切れないのも当然だ。

愛は昔から他者の気持ちに結構敏感な方である。そうなった原因は五年前のことだ。五年前のこと、忘れられない出来事……。

あの日、父と母、そして愛は車で出かけた。家族旅行だ。本当に楽しい旅だった。しかし、その帰り道、事故に遭い、父と母は帰らぬ人となってしまった。ただ一人だけ、愛は残されたのである。そして、愛は叔父夫婦に引き取られた。血の繋がりはあるけれど、これまで家族ではなかった人達に……。結果、愛は他者の気持ちというものに敏感になったのである。もし、叔父達を怒らせて捨てられたらと考えると恐ろしかったから……。とはいえ、叔父夫婦は本当に優しく、そうした考えは取り越し苦労だったのだが。

そういうわけで、愛は二人の想いになんとなくだが気付いたのである。しかし、それは愛だからこそだ。普通は気付けない。それ故に互いの心に気付けない二人は、自身の想いに必死に蓋をしようとしていた。とても辛そうな様子で……。

(気持ちは分からなくもないけど、でも、あたしにはその辺ちよつと理解できないな)

辛いのであれば思いなんて捨ててしまえばいいのに——愛はそう思う。

苦しむくらいならばさっぱり諦めて次に進めばいいのだ。

(ま、人それぞれだからね……。考えても仕方ないか)

すぐに思考を放棄した。考えても仕方ないことは考えない。だって考えたところで意味なんかないから……。

楽しい旅だったのに、両親を失うことになってしまった。あの事故で悟ったのだ。人なんていつ、どんな形で終わってしまうのか分かったものではない——と。だから答えが出せないことを考えたりなんかしないし、何かに一生懸命になるってことだってしないのだ。ただ、だからといって「けっ！ 人生なんて最悪だよ」という色々諦めて絶望した人間というわけではない。それどころかどちらかというと明るい人間に育っていると自分でも思っている。それは偏ひとえに友人や愛を引き取ってくれた叔父夫婦のお陰だろう。優しく接してくれたみんな。愛を愛してくれたみんな。お陰で腐らずに済んだ。

「もしかして一人？」

愛の思考には気付いた様子もなく、蒼葉が首を傾げて尋ねてくる。

「うん。鈴菜すずなは部活、洋子ようこはデートだったさ」

蒼葉達も知っている友人の名前を出した。

「そうなんだ。だったら私達と一緒に遊ぶ？ これから駅前に行くんだけどさ」
「駅前ねえ」

ゲーセンとかで遊ぶというのは悪くない気がする。ただ……。
チラッと雪菜へと視線を向ける。

「……………」

無言で無表情だ。何を考えているのかちよつと分からない顔である。ただ、それでも、あまり嫌がっていないことは分かった。

（蒼葉は社交的な方だけど、雪菜はそうじゃなかった——と思ったけど、何か変わった？）
愛が知っている以前の雪菜なら嫌がったような気がしたが、何かあったのだろうか？
と、そこまで考えたところで、蒼葉と雪菜のカバンにぶら下がっているマスコットに気がついた。同じものだ。いや、マスコットだけじゃない。よく見ると二人は首からペンダントも下げている。これも同じものだった。マジマジとそれを見つめてしまう。

「ん？ あっ！」

その視線に蒼葉が気付いた。蒼葉は慌ててそのペンダントを首元にしまう。そうした反応に雪菜も僅かだけ頬を赤く染めた。

（ああ、そういうことね）

すぐに二人の関係に気付く。

（そっか、想いを通じたんだ。なるほど）

それで雪菜も変わったのだろう。自然と口元に笑みが浮かんだ。

「えっと、その……愛……どうする？」

誤魔化すように改めて蒼葉が尋ねてくる。

「ああ……あたしはいいや。ちよつと用事思い出した」

恋人同士のデートを邪魔するつもりなんか無い。

「そう、えつと……それじゃあまた次の機会に」

「うん、そんな時はよろしく」

ヒラヒラと手を振る。二人は微笑むと（雪葉はほとんど分からないレベルだが）、愛を残してこの場を離れていった。並んで歩く二人の距離は、肩がくつききそうなほど近かった。

（……恋人か）

会話は少ししかしていない。けれど気付いた。二人の表情が前よりも格段に明るくなっていたことに……。

（両想いになるって人が変われるくらい凄いことなのかな？　そういえば洋子も前よりなんか最近は余裕があるように見えるし。恋人って凄いのかも……。ま、あたしには理解できなさそうだけど）

愛はこれまで人を好きになったことはない。尊敬できるとか、友人として好きだとか思ったことは沢山ある。しかし、この人を愛している——とまで強い感情を抱いたことはなかった。いや、それは恋という想いには留まらない。部活などに関してもそうだ。

スポーツに一生懸命になる——みたいな思いが理解できない。何をしてたって終わる時

は一瞬なのだから……。

だから、恋とか部活とかをするくらいなら、本とかを読んでいた方がマシだと愛は思っている。ただ読むだけ、それならばいつ終わったって別に後悔はないと思うからだ。そういうわけで愛はいつも何かしらの本をカバンに入れている。

ただ、だからといって部活や恋をしている人間を馬鹿じゃない——？ と馬鹿にするつもりはない。それどころか寧ろ、羨ましいとさえ思っていた。

(あたしにもいつか何か、一生懸命になれることができればなあ)

去りゆく蒼葉達を見つめながら、しみじみそんなことを考えた。両親を失った事故を忘れられるくらいの何かがあれば——と。

ヴィイイイイン。

「——へ？」

妙な音が唐突に背後から聞こえたのはそんな時のことだった。

「……なにこれ？」

思わず振り返る。するとそこには巨大な鏡のようなものがあった。

(なんでこんなものが？)

道のだ真ん中だ。邪魔なことこの上ない。一体誰が置いたのか？ というか、さっきまでこんなものがあったのだろうか？ 思わず愛は周囲を見回す。

(ん？ え？ どういうこと？)

そこでおかしなことに気がついた。

ここは街中だ。当然人通りも多い。だというのに、誰もこの鏡に気付いていないのだ。明らかに通行の邪魔にしかならない異様な物体があるというのに、誰もが素通りしていく。この鏡があること自体が自然だから——というワケではない。誰の目にも映っていない。愛にはそう思えた。

(見えてない？ みんなおかしい？ っていうか、この場合オカシイのはあたし？ えつと……目が変になった？ 幻覚？ 変な薬とかやった覚えはないけど……。どっかに頭をぶつけたとか？)

必死に思考する。鏡が見える理由を考える。しかし、まともな答えを導き出せない。(ダメ……。考えても無駄無駄)

結局は思考を放棄した。とはいえ、それでもやはり鏡の存在は気になってしまった。困惑しつつも愛は数度深呼吸した上で、ゆっくりと鏡に向かって手を伸ばしてみた。幻ならば触れられない。存在しているならば触れられる。少し怖いがそれくらいは確かめてみたい。ソツと指先を鏡に添えた。

カアアアアアッ！

「きゃっ！」

その瞬間、鏡が凄まじい光を放つ。強烈な閃光きやうれつに全身が包み込まれた。視界が真っ白に染まる。

第二章 重なる身体

(え? な……なにつ!! これ……なにつ?)

わけが分からなかった。あまりに唐突すぎた。一瞬自分の身に何が起きているのか、それを愛は理解することができなかった。これは夢なのだろうか? などということさえ考えてしまう。けれど、鼻や唇にかかる甘い吐息は本物だ。

(キス? 嘘、あたしキスするの? お姫様と? ちよつ……なんで? どうしてっ!!)
レインの思考がさっぱり理解できない。ただただ愛は身体を硬直させる。ギュッと思わず強く瞳を閉じた。だが、唇に唇が重ねられることはなかった。レインはギリギリのところで唇を止めた上、一度顔を離す。

(た、助かった? でも、なんでこんなこと?)

ホッとしつつも、疑問を抱く。しかし、声に出すことはできなかった。

自分を見つめるレインの視線が、なんだか怒っているように見えたからだ。いや、違う。それだけではない。苦しんでいるようにも……。

(どうしてこんな顔?)

見ているだけでなんだか愛の胸までズキンッと痛むような表情だった。抱いた疑問さえも一瞬忘れてしまうような顔。ただ呆然と愛はレインを見つめる。そんな愛に対し、王女

は手を伸ばしてきた。愛の身に着けているワイシャツに指を添えてくる。そのまま器用にボタンを一つ一つ外してきた。前がはだける。白い肌と、睡眠時用のゴム製ナイトブラ——ミストに譲ってもらった——が剥き出しになった。

「ちよっ！」

はだけたワイシャツに、黒いブラ、白いショーツというちぐはぐな下着姿にされてしまう。同性とはいえ羞恥を覚えざるを得ない状況だった。

しかし、レインの行動は止まらない。当然のようにブラにまで手をかけてくる。

「す、ストップ！ ストップストッププううっ!!」

流石に黙って受け入れることはできない。慌てて声を上げ、レインを制止した。そのお陰か、一度レインは動きを止める。

「えっとその……」

動きを止めたレイン。彼女に対して少し慌て気味に口を開く。この場合なんと言えばいいだろうか？ グルグルと思考をフル回転させ——

「あ、あのさ……いきなりこれ、なに？ なんなの？」

なんとか言葉を引き摺り出した。

「……それは」

真っ直ぐ見つめながらの問い。レインは僅かだが動揺するように瞳を泳がせる。しかし、それは本当に僅かな時間だった。

「これは練習です」

などと表情を引き締めつつ口にしてきた。

「れ、練習？ どういう意味？」

意味が分からない言葉。当然首を傾げる。

「簡単なことです。貴女もその書類で知った通り——」

押し倒された衝撃で床に落ちた書類へと少しだけレインは視線を移した。ただ、それは一瞬であり、すぐさま愛を見つめてくる。

「私は嫁ぐ身です。嫁ぐ——つまり夫の配偶者となる。その際に大事なことはなにか、愛は知っていますか？」

語るレインの口調は少しだけ普段より早口だった。ただ、あまりに想定外の事態に動揺している愛はそのことに気付かない。気付けない。

「その、よく分かんない」

上手く思考できないので、問いにも答えられなかった。

「簡単なことです。子作りですよ。夫の子を生すこと、それこそがすべてとなります」

「それは……」

それだけか？ と思わないこともない。ただ、同時に少し納得もしてしまう。特にレインの場合は……。何しろ王女だ。本で読んだ知識とかに間違いがなかったとすれば、王族にとって大切なことは血を残すことだ。当然子作りの重要性は普通の結婚よりも大きなも

のとなる。

「ま、まあなんとなく分かる。でも、それとこれに何か関係が？」

「もちろん。ありますよ」

そう言うのとレインは再び愛のナイトブラに手をかけてきた。そのまま今度は躊躇ためらいなく下着を上へとずらしてくる。

「やっ！」

結果、プルンツと弾むように乳房が剥き出しとなった。Bカップのそれほど大きくはない胸が……。小さいけれどツンと上向きがかった釣り鐘型の結構自慢の胸である。ただし、仰向けになっているせいで完全にペッチャンこにしか見えなかった。大きくない胸は左右に垂れたりなどしないのだ。が、平べったくとも扇情的ではあった。白い肌に彩りを添えるピンク色の乳首が呼吸に合わせて上下する。その様が実に淫靡いんびだ。

「ちよっ！ み、見ないでっ！」

慌てて両手で胸を隠そうとする。しかし、レインはそれを許してはくれなかった。愛の下腹部に乗った状態で、両手を挿んでくる。これでは胸を隠すことはできない。

「い、意味分かんないんだけどお！」

「意味？ ですから練習と言ったでしょ？」

「だ、だからどういう……」

「子作りの練習です。一応私は嫁ぐ身ですから、それなりの教育は受けています。夜、ど

のようにして殿方を誘うのか？ どのようにして子種を注いでいただくのか……といったことを一通り。ただ、それはあくまでも書物による知識でしかありません。実際にするとなった時、その知識を実行できる自信は正直ありません」

(それは、まあ、分かる気がする)

愛だつて年頃だ。好きな人はいないけれど、エッチなことにはそれなりに興味があつた。だから時折スマホでそういうことを調べたりなんてことだつてしている。つまり、それなりに知識はあるのだ。ただ、それをいざという時に実践できるかと言われれば……。無理なような気がした。

「だからあたしで練習するってこと？」

「そういうことです」

あつさりとレインは頷いた。

「そういうことですよ……ちよつ！ ダメ！ ダメだつて！ 無理無理！ 無理だから！ こ、こういうことつて練習でするようなことじゃないでしょ！」

ジタバタと藻掻いてみせる。だが、のし掛かるレインを振り落とすことはできなかつた。足掻く愛——そんな姿をレインはいつもと同じ無表情で見つめてくる。何を考えているのかさっぱり分からない顔だつた。

「貴女に拒否権はありません」

冷たく告げてくる。

「貴女は私の奴隷です。奴隷として……今晚の伽を命じます」

「どいて、ダメだから！ お姫様っ！ レインッ!!」

伽——言葉の意味は知っている。思わず名前まで呼んでしまった。

するとレインはビクッと眉根をはねるように動かした。同時に動き出す。愛の言葉など完全に無視して、剥き出しになった胸へと顔を寄せてきた。

「んちゅっ」

そのまま乳首にキスをしてくる。

「んっ!」

唇の柔らかな感触が乳頭に伝わってきた。それと共に甘く痺れるような刺激が走る。反射的に愛はビクンッと全身を震わせ、声を上げた。眉根にも皺を寄せる。レインはそんな愛の顔を乳首に唇を密着させたまま上目遣いで観察してきた。その上で——

「んちゅっ……ちゅっちゅっ……。んちゅうっ」

更に乳首にキスをしてくる。それも一度だけではない。二度、三度、四度——餌を啄む小鳥のように、幾度も幾度も口付けしてきた。しかも、行為は口付けだけでは終わらない。レインは舌を伸ばしてくる。繰り返された口付けによって僅かだけれど癩り始めた乳頭を、舌でレロッと舐めてきた。

「だ……駄目だ……んっ……それっ……んんんっ」

途端に胸にキスをされた時以上の刺激が走る。なんだか身体が蕩けてしまいそうな愉悦

を含んだ感覚だった。声を抑えることができない。再び愛は啼き声を上げる。

(これ……嘘でしょ？ 舐められてる。お姫様に身体を……。こんな嘘だよね？)

と、心の中では思うけれど、紛れもなく現実だ。

王女は更に舌をくねらせてきた。乳首を転がすように舌先で刺激してくる。しかも、愛撫は舌だけでは終わらない。再び乳首に唇を密着させてきたかと思うと「んちゅっ」と啜えるなんてことまで行ってきた。そのままチュウチュウと吸い立ててくる。

「あっ！ 胸……吸って……くっ……ンッ！ こんな恥ずかしい。恥ずかしいから……レイン……やめっ！ はふうっ」

どんな言葉を向けてもレインは止まらない。それどころか更に激しく胸を吸ってくる。するとその激しさに比例するように、肉体に刻まれる心地よさを伴った刺激も、より大きなものに変わっていった。

(なにこれ？ あたし知らない。こんなの知らないよ。胸……こんな……んんんっ……こんな感覚……)

年頃女子としてエッチなことを調べたりはしてきた。けれど、自慰までしたことはない。なんだか怖さを感じたからだ。それにいけないことのような気がしたから……。いなくなってしまう父と母が天国で見ているかも知れない——そう考えると、手が止まってしまう自分がいたのだ。

だからこそ、刻まれる刺激は生まれて初めてのものだった。



第三章 なんだかドキドキ、ムカムカする

(明日、何か教えてくれるかも知れないし。今日は大人しく寝るか)

そんなことを考え、瞳を閉じる。

しかし――

(明日にはまたするのかな?)

そう考えると異常なほどにドキドキしてしまい、なかなか眠ることができなかつた。

結果、翌日は朝から欠伸を連発することになってしまった。ただ、それは愛だけではなく、早くに寝たはずのレインも何故か同じであり――

「お二人とも寝不足ですか？」

などとミストにも心配されてしまう始末だつた。

*

――三日が過ぎた。

だが、未だにあの夜のことについて愛はレインとまともに話ができていなかった。

レインが執務で忙しい昼間はほとんど話せない。その上、二人きりになれる夜も、レインの就寝が異常に早いせいで会話をする暇がなかつた。

(早くなんとかしないとヤバイかも)

三日間、レインとの間には何もなかつたと言ってもいい。しかし、何も無いが緊張はある。そのせいで寝付きが非常に悪くなつてしまつていた。目を閉じているのに眠れないという状況。お陰で最近では仕事でも欠伸ばかりである。このままだといつか体調を崩してし

まいそんな気さえした。

(こうなると今晚こそお姫様と話を……)

待つていてはきつと駄目だと思ふ。自分から話をしなければならぬ——と、毎日考へてはいるのだ。しかし、どうしてもレインと会話することに緊張を覚えてしまう自分がいた。結果、毎晩声をかけられずということに……。

(あたしってこんなキャラだったっけ?)

自分でも結構社交的な人間だと思つていたのだが、案外そうではなかつたらしい。

「はあああゝ、なっさけな」

箒を持った状態で大きく溜息をついた。

「大丈夫ですか姫様？」

聞き慣れた声が聞こえてきたのはその時のことである。

「——ん？」

視線を向けると城中の廊下をミストとレインが歩いてた。コツコツと足音を響かせながら、二人はゆつくりとこちらに近づいてくる。思わず愛は物陰に隠れた。

(つて、なにやってるのよあたしはっ!!)

自分で自分の行動の意味が理解できず、心の中でツッコミを入れる。

「大丈夫？ 何がですか？」

そんな愛には気付くことなく、レインは足を止めるとミストに対して首を傾げた。

「何がつてその……最近姫様、なんだかお疲れのように見えまして」

「ん……ああ」

心当たりがあるのか、ミストの言葉にレインは頷く。

「少し寝不足で」

「寝不足？」

（寝不足？）

ミストが問い返すと同時に、愛も心の中でレインに尋ねた。

レインが寝不足などとはおかしな話だからだ。最近レインは自分よりも遥かに早く寝ていたからだ。だから話もできないという状況で……。

「寝付きが悪いのですか？ それと……も……」

そこまで口を開いたところで、ミストは一度口を閉じた。何故か分からないけれど、ほんのりと頬を赤く染める。

「どうしました？」

不思議そうにレインは首を傾げた。

「あ……いえ、別になんでも」

慌てた様子でミストは首を横に振る。何かを誤魔化すような態度に見えた。

「なんでもない風には見えません。どうしたのですか？」

流石に目敏いレインは気付いたのか、質問を重ねる。

「どうって……それはその」

「私に誤魔化しは許しませんよ。はっきりと教えなさい」

どうやらレインは隠し事の類いがあり好きではないようだ。重ねてミストに問う。対するミストは「え〜と、あの……」と困るような素振りを見せた後、やがて諦めるようにはあつと溜息をつくつと――

「その……夜、愛さんと……その……と、伽を……」

恥ずかしそうにしつつ、ミストはそのような答えを口にした。

「――なっ!？」

（――なああああつ!）

レインが驚く。それは隠れている愛も同様だった。

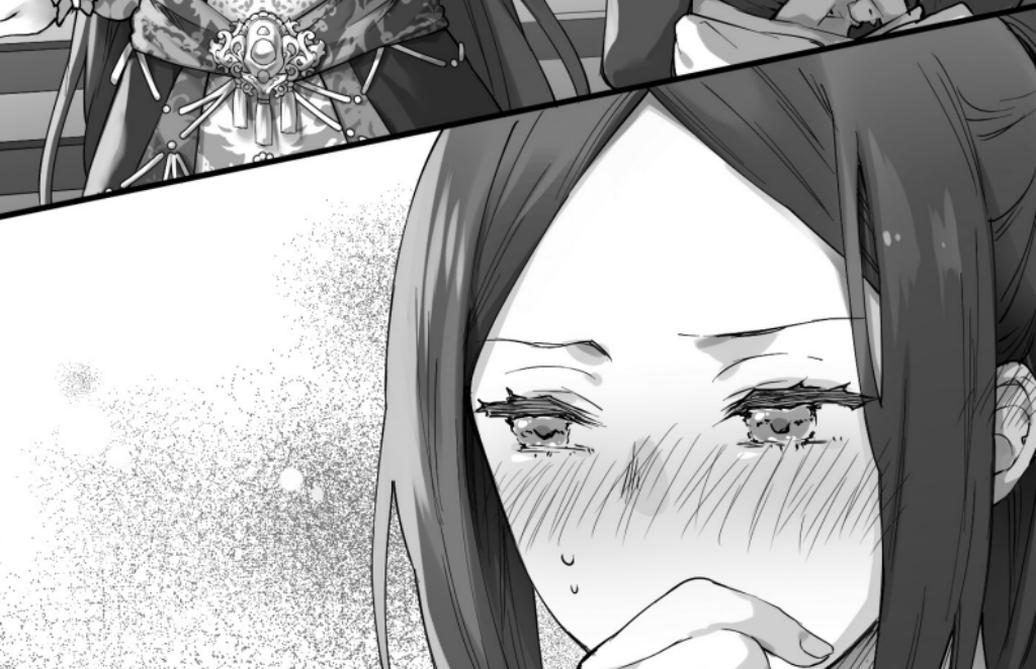
「ど、どういうことですか！ 何故そうなるのですかっ!!」

珍しくレインの顔に動揺の色が浮かぶ。

「何故ってそれはその……前にお二人で寝ているところを見ちゃいましたし……。それにその、ここ最近愛さんも寝不足みたいでしたから。二人で寝不足――となるとやつぱり……そ、そういうことなのかなあと……。あ、あははは」

それなりに筋が通った思考だった。

（でも、違うううう！ 違いますミストさん！ してない！ そんなことあたし達……あ、あの夜以来してませんかっ!）



「ち、違いますよミスト！ それは勘違いです。していません。私達はあの夜以来、そういうことはしていませんから！」

愛に同調するようにレインはミストの考えを否定した。

「そうなのですか？ まあ、それならばそれでいいのですが。しかし、だとすると何故お二人は寝不足なのですか？」

「何故ってそれは」

レインは口籠もる。

（寝不足。レインが……。どうして？）

愛にも理由は気になった。取り敢えず先程までの羞恥を忘れ、王女の答えに意識を集中させる。

「単純に寝付きが悪いだけです。愛に関しては……知りません」

けれど、聞いたところで特にレインの考えが分かるような答えではなかった。はあっと愛は溜息をつく。

「なるほど。そうですか。まあ、姫様がそう仰るのであればそういうことにしておきます。しかし、あまり無茶はしないで下さいね。心配になってしまいます」

ジツとミストはレインを見つめる。侍女のそんな視線を王女は真っ直ぐ受け止め——
「分かっています」

実に素っ気ない返事をするのだった。

さ。愛は心も身体も一つに溶け合い、混ざり合っていくような感覚を覚え、うっとりとした瞳を閉じるのだった。

そのまま二人は眠りに落ちていく……。

*

「なんかちよつと恥ずかしいかも」

愛は裸だった。一切衣服を身に着けていない。いや、裸なのは愛だけじゃない。レインも同じように生まれたままの姿を晒していた。

「ふふ……肌を見せるのは初めてではないでしょう？ 今更恥ずかしがることなんてありませんか？」

羞恥で頬を染める愛に対し、挑発するような言葉をレインが向けてくる。

「それはそうかも知れないけど……。部屋以外でこういう姿になるのって初めてだし」
周囲を見回す。

確かにここはいつも身体を重ねている寝室ではなかった。

場所は浴室だ。しかも王族専用の大浴場。かなり広いスペースである。ちよつとした銭湯くらいの広さはあるだろう。だからこそ羞恥を覚えてしまうのだ。

(銭湯とか温泉なんて日本じゃ普通だけど……でも……)

一緒に入っている相手は知らない他人でも、ただの友人でもない。大好きな人、愛しい人、最愛の恋人なのだ。恥ずかしがるなど言われても無理である。

「レインは恥ずかしくないの？」

「もちろんです。肌を見せる……そのことに羞恥を覚えることなどあり得ません」

「あり得ないってそんなこと……」

あるのだろうか？ と考え、すぐに気付く。

（そういえばレインって着替えとか全部侍女にさせてるんだもんね）

肌を誰かに見せるということは王族にとっては当たり前だ。今更恥ずかしがることではないのだろう。

（でも、それって……）

自分以外の人間もレインの柔肌を見ているということになる。なんだかちよつとムカムカしてしまった。

（つて、侍女さん達はただ仕事をしてるだけだし……。結構私って嫉妬深いのかなあ？）
が、すぐに冷静さを取り戻す。ブンブンツと首を横に振りつつ、改めてレインを見た。

「——ん？」

そこで気がつく。

レインの頬がなんだか赤く染まっていることに……。

（気のせい？ いや、違う）

マジマジとレインを見る。やっぱり顔は赤いままだった。

「……な。なんですか？」

「レインも恥ずかしいんでしょ？」

明らかに動揺する王女の姿に、自然と口元には笑みが浮かんだ。

「なっ！ そんなこと……。肌を見せる程度で私が……」

「本当のことを教えて」

否定を重ねてくるが受け入れない。真っ直ぐレインを見つめ、重ねて問う。それに対し

王女は「うぐっ」と口籠もった後――

「そ、そうですよ。恥ずかしいですよ」

観念したように自身の羞恥を認めた。

「恥ずかしくないわけじゃないじゃないですか。好きな相手に肌を見られる……。侍女達に見

られるのとはまるで違いますもの」

「そっか……。ふふ、そっかそっか……」

なんだか嬉しくなってしまう。

「な……。なんですかその笑顔は？」

「ん？ いや……。そのね……。レインもあたしと同じだって思ったら嬉しくなっちゃってさ。

だから……。その……。あたし我慢できないかも」

「我慢？」

「好きって気持ち……。抑えられない」

愛おしさがわき上がってくる。抗うことなどできなかつた。

「ちよつと後ろを向いて」

想いのままにレインに声をかける。

「後ろ？」

不思議そうに首を傾げつつ、王女は愛に背を向けた。

「あたしがレインを綺麗にしてあげる」

囁きかけながら、美しい背中をギュッと抱き締める。自分の肢体を愛しい人の身体に密着させた。柔らかく温かな感触が実に心地いい。

「——え？」

「ふふ」

戸惑うレインに対し、愛は妖艶な笑みを浮かべてみせた。

そのまま行動を開始する。石鹸を泡立てると、自分の身体を沫塗れにした。その上でレインをもう一度抱き締める。もちろんただ抱くだけではない。綺麗にする——その言葉通り身体をくねらせ始めた。自身の肢体で恋人の肉体を綺麗にする為に……。

「やっ！ ちよつ……恥ずかしい。こんなの恥ずかしいです」

「分かってる。あたしだって恥ずかしいもん。でも……止められない。レインのことが好きだから……」

囁きかけつつ、肢体をくねらせ続ける。胸で、腹部で、レインの背中を擦り上げていく。グチュグチュグチュグチュツツという音色が響いた。耳にしているだけで興奮してしまう音だ。



ジンジンと秘部が熱くなつていく。白い肌が桃色に紅潮していった。

そうした劣情を抱えつつ、抱き締めるだけではなく手で王女の肢体を撫で回したりもしてみせる。レインを綺麗にする——言葉通り、乳房を掌で撫で回し、括くわれを優しくさすつてみせた。太股だつてなぞつていく。レインの全身に沫を染み込ませていくように……。

「はふう……はあつはあつ……はああああ……愛……愛いいい……」

愛の動きに合わせてレインはどんどん漏らす吐息を荒いものに変えていった。手を動かすたびに肢体をビクッビクッとヒクつかせながら、潤んだ瞳を切なげに向けてくる。撫でられるだけでは足りない。もつと感じたい。もつと感じさせて欲しい——とでも言うような視線だった。

向けられる想いに愛は応える。見返つてこちらを見つめるレインの唇に自身の唇を寄せると、躊躇うことなく口付けした。

「んっちゅ……ふちゅっ……むちゅうっ」

レインの口腔に舌を挿し込む。

「んっふ……はふっ！」

それだけでも気持ちがよかつたのか、ビクンッと王女は肢体を震わせた。そうした反応に更に喜びが膨れ上がってくるのを感じつつ、舌を蠢かして口内を掻き混ぜ始める。乳房と背中を密着させながら、貪るように口腔を蹂躪じゅうろうした。

「ちゅるっ……ふっちゅ……んちゅっ……はちゅうっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>